KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

異文化と向き合う

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 隆司 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/5729

異文化と向き合う

短期大学部教授　前田 隆司

外国に留学する学生の話を聞いていると、異文化へのあこがれ、国際交流の楽しさばかりが語られて、異文化の中に身を置くことへの不安の声はあまり聞かれない。少し能天気ではないか、とこちらが不安になることがある。異文化との接触、交流によって人は視野が広がり、ものの見方も変わる。国や社会の変革、発展のきっかけにもなる。だが、言語や民族、歴史、生活習慣が異なれば、当然、考え方の食い違いや感情の対立も起きる。それが衝突にエスカレートすることもある。人・モノ・情報の交流が日常茶飯事になったグローバル社会。国籍や民族などの違いを超えて相互理解が進むかたわら、逆に宗教や歴史観など文化的な対立も深刻になっている。

人間はとかく理性より、イメージで人や物事を判断しがちだ。日常的に接する機会のない異文化や外国に対してはなおのこと。そうしたイメージは大抵、ステロタイプで、往々にして偏見や蔑視が含まれる。国家や民族間の対立や紛争を煽る要因にもなれば、逆に対立や紛争が憎悪を生み、偏見や蔑視を増幅させる悪循環が生まれることも少なくない。多くの民族や国民の共存のためには異文化理解は不可欠だ。しかし容易くはない、ということも自覚したほうがいい。

ステロタイプ

アメリカ人は活動的。フランス人はオシャレ。イタリア人は情熱的。ドイツ人は実直、英国人は……。世界は多様な民族や国家からなるが、それぞれの民族や国民に対し漠然とではあるが、一定のイメージがある。それは固定したものでなく、時代や、見る人の階層、年齢、立場などによっても変わるが、往々ステレオタイプ化されている。20世紀を代表する米国のジャーナリストで政界でも活躍したウォルター・リップマンは「人間はステレオタイプの観念や考えに縛られている」と指摘している。

その著「世論」（岩波文庫）の中で、古代ギリシアのアリストテレスも「奴隷はそうなるべく、身体が丈夫なように生まれてくる。理性はあっても使用は認められない」と述べた、と紹介している。古代ギリシアの民主制は奴隷制の上に成り立っていたが、民主制を担った政治家や知識人らは奴隷の存在に何ら疑問を感じなかった。理性と実証を重んじた哲人ですら、当時の社会の通念の虜になっていたわけだ。

リップマンはさらに本の中で、興味ある実験結果を紹介している。第一次世界大戦後のドイツ・ゲッチンゲンで開かれた心理学会。40人の専門家が集まった宴会場に、突然、道化師とこれを追って拳銃をもった黒人が飛び込んできた。黒人は道化師に馬乗りになって拳銃を発射した後、2人はすぐに会場を立ち去った。座興で宴会の参加者には事前に知らされていなかった。あとで参加者に目撃した事実を報告書にしてもらった。すると、ほぼ事実に近かったのは40人中、わずか6人だった。なかには全く事実にないことをねつ造した人もいた。ふだん、人間観察ではプロを自認する専門家たちにしてこの結果である。

リップマンは専門家といえども目前の出来事を、事実に即して観察するのでなく、自分の固定観念や思い込みで見てしまうという実例として挙げたのだ。「人は見てから定義するのではなく、定義してから見る」とリップマンは言っている。

こんな話もある。英国・エリザベス朝の廷臣にして冒険家のサ・ウォルター・ローリは最期、断頭台の露と消えたのだが、ロンドン塔に幽閉されているとき、窓の下で取っ組み合いの大喧嘩が始まった。それを一部始終、見ていて翌日、その場にいた関係者に聞いてみると、事実は自分の観察したことと、ことごとく食い違っていた。ウォルターはがっくりきて、塔内で書いていた著作の執筆を途中でやめてしまった。「目前のことすら不確かなのに、過去の歴史なんか書けるわけがない」。それで彼の遺著「世界史」は一巻しか残っていないという。

ステロタイプの見方は必ずしもデッチ上げではない。私は中国に3回しか行っていないが、北京や上海などでバスを待っていたら平気で列に割り込む

人が少なくなかった。それで中国人に対する私のイメージはあまり良くはない。もちろん、すべての中国人のマナーが悪いとは思わない。わずかな体験や事例をもとにした安易な一般化は避けるべきだが、中国人の公共マナーの悪さは、あながち的外れではなさそうだ。中国共産党政府も認識していて、世界各国の人々が訪れた2008年の北京オリンピックの時、国民に対しマナー向上のキャンペーンを行った。

問題は一面的なこと

ステロタイプが問題なのは、ものごとを部分的、一面的にしか見ていないのに、それが全てと断じてしまうことだ。ものごとはいろんな要素や要因からなり、さまざまな様相をもつ。個人の性格や行動も同じで、同じ国や民族に属していてもその人の個性はいろいろ。現実は多面的で複雑なのにそれを特定の見方で押し切って、偏見や誤った考えにこり固まると、真実が見えなくなる。人同士、国同士の相互理解が難しくなる。

20世紀以降の世界はとくに映像の影響力が増し、交通や運輸、さらにメディアの発達で情報量が爆発的に増えた。テレビ、新聞、ラジオ、映画、最近はネットなどで莫大な情報が地球上を飛び交う。しかも、その情報は断片的で、脈絡がなく、多くは誇張され、歪められている。そうした不確かな情報が人々の意識の中に日々浸透している。情報社会は人々のコミュニケーションを緊密なものにするかたわら、偏見や固定観念を絶えず、作り出し、現実から遊離したイメージを人々の心に植え付ける。

リップマンが「世論」を著したのは第一次大戦後で、ヨーロッパ社会が急速に情報化、大衆化し始めた時期である。本の中では、ソビエト共産主義へのステロタイプ的な見方がはびこり、恐怖心をかきたて、ナチスによる巧妙な宣伝でユダヤ人差別の意識が大衆の心に巣食う様子も描かれている。そうした人々の不安定な社会心理が第二次大戦の勃発の大きな要因にもなる。

生得的に備わった

人間の見方がステロタイプなのはそれなりの理由が考えられる。人間が直接、見聞できる事柄はごく限られている。大半はまた聞きか、噂の類である。それでいて人間は日々、予測できない出来事に出くわし、その都度、対処しなければならない。遭遇した事柄を瞬時にさまざまな角度から分析し、判断を下すのは不可能だ。そんな悠長なことでは対処に遅れ、場合によっては致命的なことになりかねない。だから、あらかじめ自分の判断の枠組みを拵えておいて、とりあえず事態に対処する。これがステレオタイプというもので、人間が進化の過程で獲得したという生物学的な解釈である。

人類が誕生して約５００万年。われわれの直接の祖先であるホモ・サピエンスは５０万年から２０万年。これまで人類が生きてきた９９％は狩猟採取の時期にあたる。類人猿と同様に暮らしていた森林からサバンナに出て、食うか、食われるか、いろんな動物との弱肉強食の世界を生き抜くうえで自然選択・適応の結果、人間に生得的に備わった、という説明だ。

それと、ステロタイプとは別に、各国は隣国を悪く言う習性をいつのころからか、身につけたようだ。梅毒が日本に伝わったのは１５世紀末で、ヨーロッパから中国を経てとされるが、日本では江戸時代ごろから唐瘡（とうがさ）と呼んできた。これが英国では「フランス病」、フランスでは「英国病」となる。このほか、春先、日本に突風をもたらす温帯低気圧、発生場所が台湾近くの海上であることからかつては「台湾坊主」と呼ばれた。それが転用されて「はげ頭」に。戦前、トコジラミ科の昆虫は「南京虫」だった。隣人を羨ましく思う心理は「隣の芝生は青い」、この場合は逆で「隣の芝生は汚い」である。

オリエンタリズム

近代以降、異文化や外国に対するステレオタイプの見方は、多分に植民地政策によっても形作られてきた、と言われている。それが21世紀の今日の国際政治や外交の場にも大きな影を落としている。エドワード・サイードの著作「オリエンタリズム」（平凡社）はそれを論じた著作だ。サイードはパレ

スチナ人。エジプトなどで教育を受け、米国のハーバード大などで学位をとり、中東のイスラム圏と、それと対立する米国の両方で暮らした。その経歴が著作にも反映されている。

それによると、英仏を中心とした西洋列強は19世紀から20世紀にかけ、中近東のアラブ・イスラム圏（オリエント、西洋から見て東方という意味）の多くを植民地にした。これらの地域を侵略し、統治する過程でオリエントに対する西洋の偏った見方が形作られた、と述べている。それは憧憬に偏見や蔑視などがない交ぜになったものだという。「目には目を、歯には歯を」の血と復讐の世界。男性優位の部族社会。女性は従属的かつ情熱的でセクシー。アラビアンナイトを彷彿とさせるエキゾチックな土地柄、といったイメージや観念が、現実とは無関係に創作され、西洋人に心に根を下ろしていった。そして中近東の社会は、西洋より劣った未開社会で民主主義や科学技術を受け入れない野蛮な地域というレッテルが張られる。こうした過程をサイードはフローベルら西洋の文学や美術など素材に政治的、経済的な利害を絡ませながら、描出している。

つまるところ、「オリエンタリズム」とは、西洋が中近東のイスラム・アラブ社会を従属的な位置に貶め、それを維持するために作り出したイメージや観念、また事実からは離れ、誇張され、歪曲された言説の総称、ということだ。

イギリスの大英博物館やフランスのルーブル美術館に行くと、中東イスラム諸国の歴史的な遺物が多数保存されている。過去１世紀以上、かけて英仏の軍隊が現地から持ち帰ったものだ。例えば、ナポレオンがエジプト遠征で発見したロゼッタ・ストーン、古代エジプト文字の解明につながる碑文字が書かれた学問的にも貴重なものだが、今も大英博物館に保管され、エジプトが返還を求めている。「オリエンタリズム」に思いをはせると、人類の財産ともいえる大英博物館やルーブルの美術品を鑑賞する眼も変わってくる。

オリエンタリズム批判

「オリエンタリズム」に批判がないわけではない。政治的な力関係、権力的な要因をことさら強調し、一方的過ぎるというものだ。19世紀の西洋の画家たちはオリエントに憧れた。ドラクロワは「アルジェの女性たち」、アングルは「グランド・オダリスク」と、ハーレムの女性たちを描いた作品を残している。画家たちの胸の内にはヨーロッパ人の優越感やオリエントに対する差別意識もあっただろうが、西洋と異なる文化や世界への憧れがあったのは確かだ。それは西洋文化が絶対ではなく、それ以外の文化の価値も認めるという相対主義に目を開かせる。

主に発展途上地域を対象にいろんな文化を比較研究する文化人類学は欧米が主流だ。「オリエンタリズム」を推し進めると、文化人類学は西洋人による偏見と独断に満ちた研究で、学問として疑問符がつくことになる。文化人類学だけではない。社会科学、人文科学の研究は、どのみち当の研究者の階層や価値観、好悪感情などと無縁には成り立たない。大なり小なり、その研究者の党派性やイデオロギー性などが研究成果に出る。サイードは「オリエンタリズム」を克服するには、押しつけられた認識の枠組みを壊すしかない、と言うが、果たして、どこまで壊すことが可能だろうか。要は自分の見方の偏りを常に自覚し、客観性を貫こうと心がける姿勢が大切だ、ということではないだろうか。

９・１１

だが、「オリエンタリズム」の視点は現代も有効だと思う。世界を震撼させた2001年9月11日の米国での同時多発テロ。ニューヨークの世界貿易センタービルにイスラム過激派の飛行機が次々と突っ込んで自爆した。猛煙を吹き上げ、崩れ落ちる高層ビル。蜃気楼のような衝撃の映像が世界中の人々の眼を釘づけにし、米国人に憎しみと「オリエンタリズム」の心情を呼び覚ました。米国内は復讐心に沸き立ち「イスラム教徒はテロリストだ」「アラブ人は危険だ」とアラブ・イスラム社会の人々を十把一絡げにしたステロタイプの見方が社会を覆う。

ブッシュ大統領は、9・11を当初、国営放送で賞賛したイラクを「悪の枢軸」と呼び、２年後の春、「フセインによる大量破壊兵器の秘匿」を口実にイラク戦争を始める。仏独は反対したが、米国のメディアはこぞって「正義の戦争」を後押しした。新聞に少しでもアラブやイスラムの肩をもつような記事を書くものなら、そのコラムニストは次から執筆できなくなった。テレビの３大ネットワークも反アラブ・イスラムの論調で埋め尽くされた。メディア王、マードック傘下のニュース専門チャンネル「ＦＯＸニュース」は米国と同盟の英国軍を「われわれの部隊」と終始、呼び続け、客観報道の姿勢をかなぐり捨て、愛国心を煽った。

9・11のテロ、続くイラク戦争によって「オリエンタリズム」の観念に憎悪や復讐の感情が吹き込まれ、「アメリカとアラブ・イスラムの対決」という構図が米国ばかりか、米国を支持した日本の世論をも席巻する。米国の政治学者ハンチントンは、社会主義圏崩壊の冷戦後の世界を、異文明の衝突の世界として描き出したが、それになぞらえる人もいた。

ルサンチマン

西洋、それに米国と、アラブ・イスラム社会との確執の背景には、近代以前に遡る複雑な歴史的感情も絡んでいる。中世の中近東はイスラム教の勃興で、西アジアや北アフリカ、イベリア半島などヨーロッパまでその勢力を拡大した。中国からは紙の使用を、インドから十進法の数学を取り入れ、アリストテレスらの著作はアラビア語に翻訳され、古代ギリシアの文物を継承した。経済力、軍事力は言うに及ばず、自然科学や人文科学の分野でも他の文明世界を凌駕し、世界の中心をなした。一方、当時の西洋はその周辺にある後進地域に過ぎなかった。

それが地理上の大発見やルネッサンスの近代以降、優劣の立場が逆転する。中近東は西洋に追いつかれ、追い抜かれ、さらに植民地として搾取されるまでになる。それでも西洋の文化を顧みることは少なく、経済的に豊かで科学技術を発達させた欧米との格差は広がる一方となった。西洋など足元にも及ばなかったかつての栄光が１、２世紀の間に無残に葬られ、ルサンチマン（怨

恨）の感情となって中近東の人々の意識下にうっ屈。政治的、経済的対立に触発され、反欧米感情が噴き出すことになる。そう考えても、さして的外れではないだろう。

近代化の日本

アラブ・イスラム社会と違い、近代の日本は西洋の文化をいち早く取り入れ、社会発展の原動力にした。黒船到来をきっかけに優れた西洋の科学技術に触れた日本は、欧米を新しい国や社会作りの模範とする。政治や法律、経済、教育はもちろん、哲学、文学、音楽、絵画とあらゆる分野にわたり、その制度や方法、技術を積極的に導入した。明治の「富国強兵」「殖産振興」策である。以来、日本は欧米モデルの近代化路線をひた走る。19世紀半ばから20世紀にかけ、西洋列強はアジアへの侵略を強め、大国インドは英国の完全な植民地となる。東アジアの盟主、中国も半ば、植民地と化す。そうしたアジアにあって日本だけが、欧米に倣うことで、欧米列強と肩を並べるまでに力をつける。

急速な近代化の背後で日本は、昨日までの江戸文化を封建的で、価値のないものと、と切り捨てた。近代史家の渡辺京二さんは、これを強く批判する。その著「逝きし世の面影」（平凡社）には、英国の外交官、オールコックや旅行作家のイザベラ・バードら幕末から維新にかけ来日した西洋人による日本の印象記が数多く取り上げられている。

彼らが見たのはいわば、江戸社会の残照だが、近代化以前の日本社会のありように驚くほど好感を抱いている。中には男女混浴や妻の眉落とし、お歯黒など非道徳さや醜悪さを感じた風習もあるが、「日本は清潔」「日本人は貧しいが、幸せに暮らしている」「身分制はあっても自由だ」「外国人にも親切」とほめ言葉がならぶ。日本の歴史家の多くはこれらを西洋人の偏った見方、異文化への郷愁に過ぎない、とあまり注目しないが、渡辺さんに言わせると、それは「近代化＝進歩」という固定観念に縛られた見方だ。

彼ら西洋人が見たものは紛れもなく「古き良き日本の文明」の一端に違いない。産業革命を経た19世紀ヨーロッパの工業社会に生き、階級闘争や劣悪な都市環境も知り、その比較をもとに近代以前の日本に社会の居心地の良さ

を感じ取った、というのだ。灯台下暗し。捨て去った自国の良さを外国人に教えてもらったというわけだ。広重や北斎ら江戸期の浮世絵を早くに評価したのは、ゴッホやマネら19世紀の西洋の印象派の画家だった。社寺や仏像など日本の伝統文化の価値を再発見したのはフェノロサら西洋人だった。西洋ばかり見ていた明治初期の日本人には、自分たちの足元を見つめる余裕がなかった。

対中国関係

日本の「近代化」は対中国関係をこじれさせる。国内の体制が固まらないうちから日本は欧米列強に遅れまいと、朝鮮や中国への侵略を企てる。当初、日本の一部政治家や識者、民間人の中には、朝鮮や中国の近代化を支援し、ともに手を携えて欧米列強に対抗しようという動きもあった。

明治の代表的知識人、福沢諭吉は、西洋文明を理想として国家と個人の自主独立を唱えた。日清戦争の10年ほど前、新聞に書いたと「脱亜論」で、封建的な社会から、なかなか脱皮できない中国と朝鮮を「亜細亜東方の悪友」とし、「西洋人がこれに接する風に従て処分すべきのみ……謝絶する」と述べた。福沢は、朝鮮の金玉均ら急進開化派を支援し、慶応義塾にも朝鮮人留学生を多数受け入れたが、金らの改革クーデターの失敗で、大きな挫折感を味わう。

1911年の辛亥革命で清朝を倒した孫文には犬養毅や宮崎滔天らが支援した。犬養らの勧めもあって清朝末期、日本には多い時で一万人近い中国人留学生が訪れ、日本に近代化のお手本を求めた。だが、日本政府はすでに日清、日露戦争に勝って朝鮮を併合、中国北東部をも手中にしていた。1924年、来日した孫文は神戸で「西洋覇道の走狗か、東洋王道の守護者か」と日本に選択を迫ったが、日本の政府や軍部の進む道はもう決まっていた。やがて日本は侵略の手を中国本土に伸ばし、日中戦争、太平洋戦争に突入し、破滅への道を進む。

日本の侵略

日中関係は古代から現代まで2000年近くに及ぶが、近代以降、日本の侵略、戦争によって中国の対日感情は悪化、日中双方に和解しがたいほどのわだかまりが生じ、それが今日まで尾を引いている。日本と中国の関係は、欧米とアラブ・イスラム社会との関係に似たところがある。ともに歴史の展開によって力関係の逆転が生じた。

文明発祥の地、中国はずっと東アジアの盟主だった。日本の文化は、漢字や律令制をはじめ、仏教や文学、絵画、建物など多くを中国に負っている。それが明治以降、日本は手のひらを返したように中国にそっぽを向き、西洋の後を追った。いち早く近代化に成功してからは、かつての盟主の植民地化を企てた。中国にすれば、忘恩の所業と映ってもおかしくはない。

さらに敗戦後の約30年間、日本は米国との同盟の下、共産主義の中国と対峙しながら世界の経済大国として復活した。しかし、改革開放後、中国は急発展を遂げて巻き返し、日本を追い抜いて米国と並ぶ経済大国になった。国際政治の場でも大きな役割をはたすようになり、その大国意識が日本だけでなく、東南アジア諸国との間でも領土問題などで摩擦を生んでいる。

防空識別圏の一方的な設定や、これ見よがしの国力の誇示など最近の中国の多くの行動は批判に値する。ただ、近代以降、欧米や日本に領土の一部を奪われ、屈辱や辛酸を舐めさせられた中国の立場を思えば、日本人として複雑な思いにかられる。日本と中国両国民の相手国に対するイメージは、国家関係の良し悪しを反映して、変動してきた。1972年の日中国交回復時は非常に良かったが、尖閣列島を巡る衝突以後は最悪の状態になっている。日中両国とも世論は硬化し、一触即発を憂える声もある。この時期、政治家は従軍慰安婦など戦争時代の微妙な問題について過激な主張を控えるのが賢明というものだが、日本では挑発的な発言が次々に飛び出す。愚かで無責任というしかない。

日本と中国は文化的に異質

日中両国の関係について「同文同種」という言葉がかつて使われた。使う文字も同じ、人種も同じアジア人。また「一衣帯水」とも言われた。日本と中国は兄弟のような身近な間柄という例えだ。だが、日本と中国は文化的に異質だという識者は多い。中国人と交流が深い社会学者の橋爪大三郎さんは「中国は矛盾に満ちて謎だらけの国、いや国と言っていいかどうか」と共著「おどろきの中国」（講談社現代新書）に書いている。

「中国人は個人主義的でアグレッシブ。秩序を無視する」「国を信用しないが、統一国家を望んでいる」「一番信用できないのが中国人だと、中国人が言う」などふつうの感覚では理解しがたい指摘が並ぶ。文化人類学者の青木保さんも「異文化理解」（岩波新書）の中で「近代日本は中国や韓国を異文化理解の対象としてこなかった」と言っている。中国や韓国を異文化として理解することで、自国の日本文化も捉えなおすことができ、それによって互いが冷静に交流できる道が開かれるとする。

「同文同種」といった言葉が生まれたのは、日本にとって朝鮮や中国とは古代から文化的、経済的なつながりが深く、身内や親族といった感覚がどこかにあって、一種の「甘えの意識」が生まれていたからではないか。

「文化はソフトではない。ハードだ」と青木さんは言う。社会のハードといえば、一般的に政治や経済、教育などの制度を連想するが、そうではなく、文化がハードで、その文化が制度を作ると考えたほうがいい、という。実際、制度と違い、文化はなかなか変化しない。敗戦で日本は国土の中心部が焼け野原になり、伝統的な社寺仏閣の多くも灰に帰し、生け花や茶道など古来の芸事も一時廃れた。それでも日本の文化は滅びず、国土も再建できた。

古い建造物や伝統芸能や行事は日本文化が表現されたものではあっても、日本文化そのものではない。文化自体は目に見えず、その文化を享受する人たちも意識化できない。しかし、社会を形成する根本の力であり、そこに生きる人々のアイデンティティの源泉だというわけだ。そう考えれば、文化の否定はそこに生きる人々の否定と同じことになる。

戦時中、日本は占領・統治した朝鮮や中国東北部で、日本語を強要したり、

神社を建てたりした。朝鮮人や中国人からすれば、日本の文化の押し付けで、自分たちの文化の否定と受け止めたとしても無理はない。このような日本の「同化政策」「皇民化政策」がいかに残酷であったか、想像できる。

異文化理解は、異なる文化と、そこに生きる人々の存在や考え方を互いに認め合うことから始まる。この当たり前のことがなかなか実行に移せない。

※文中に掲載以外の主な参考・引用文献は、「日清・日露戦争」（岩波新書、原田敬一）▽「完本　一月一話」（岩波書店、准陰生）▽「メディア文化論」（有斐閣アルマ、吉見俊哉）▽「イスラム世界はなぜ没落したか？」（日本評論社、バーナード・ルイス）